

愛染時雨

今東光

新潮社



愛染時雨

昭和三十七年十一月六日 印刷
昭和三十七年十一月十日 発行

定価三三〇円

著 者 今 東 光

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(341)六七〇一
振替東京八〇八番

乱丁・落丁のものは
お取替えいたします

印刷・図書印刷株式会社

製本・神田加藤製本所

(c) T.KON

Printed in Japan

愛染時雨・目次

蟬 の よ う に	有 馬	稗 搗 節	鐘 	河 内 野	熊 野 愛 染	系 図	牛 の 巻
一三	二六	六	八	三	四	五	七

満願……………一三

女猿……………七一

血統……………一九

まちがい……………二七

宝石……………三五

變童……………四三

似たり笠……………六三

跋……………八二

装
幀

米
良
道
博

愛染時雨

牛の巻

晩春初夏の夕陽が漸く沈みかけて、空は氣味が悪いほど紅い。

台所では早や母親が竈前に坐り込んで夕飯の釜を焚きつけていたし、父親は風呂に入ろうと湯殿の風呂桶の蓋を取って、中の湯をかき廻している音まで聞えた。

ひっそりとした夕まぐれだった。

お夏は先刻から縫物をしていた。膝の前にひろがっているのは、白地に藍の匂いも高い大きな菊を描いた浴衣で、目の前に迫った盆踊りに着て行こうというのだ。ふと暗くなった台所から、一条の光りがさしているの、目を挙げて見ると背戸で鎌や鎌を洗っている留吉の後姿が見える。作男の留吉は身体を二つに折っているの、頑丈な尻が見える。それが股引を穿いているので、彼の逞しい身体つきの裸を見ているようだ。うんと踏ん張ってひろげた股の間から、大きな丸の包みがくつきりと

見える。お夏はそれを見てると下腹部の辺がじいんと熱っぽくなってきた。

(また今夜も——)

と思うと、あんな格好をして自分の寢床に忍んでくる裸の留吉がありありと網膜に灼きついているのだ。急いで縫物をかたづけると、台所から下駄を突っかけて背戸へ出て行つた。

「何所へ行くんや」

母親が直ぐ声をかけた。

「何所へも行かへん。裏の戸締りをするんや」

「戸締りやったら、お母んがしたで」

「あ。そう。おおけに。縫物がはかどらんよって、お前戸締りしてくれたんか」

「早う仕上げてもらわな、手伝いにならへん。何時までかかるとるこっちゃ」

「へえ。すんまへん」

と言いながら背戸裏の井戸端に立つと、釣瓶の水を掬んで留吉の洗う手許に、ざあっと音立てて流してやった。「もう結構だア。これで洗い終えましたよって」

「そんなら手エお洗いな」

お夏はまた井戸から水を掬んで、今度は留吉の手にかけてやる。留吉は手を洗うと手拭でふいているのへ、お夏はそっと手を重ねて、

「また今夜なア。待ってるよ」

と囁いた。留吉はこっくりして見せると、夕まぐれの中でにっこり笑ったが、日灼けした黒い顔の中で白い歯がきらりと煌めいた。

「あんまし度重なると知れまっせ」

「知れるかいな。大丈夫や」

「大丈夫か」

「お父うは疲れて直ぐ睡りよるし、お母^かんかてお父うに齧りついて寝とるよつて、よう知らはらへん」

「ウフ……そんなら今夜も行くで」

「はあ。待ってるで」

くると袂をひるがえすとお夏は台所から茶の間に行つた。お膳拵えのためだ。

背戸の裏木戸の外は漠々たる玉葱畑だ。その広い畑地に野井戸が沢山掘つてある。遅くまで働いている農夫等は野井戸で道具や手足を洗いながら、真赤な夕陽が沈むのを眺めるのだ。

玉葱がアメリカに売れた頃は、この泉州路の百姓は金が儲かり過ぎるほど儲かった。彼等は玉葱と呼び捨てにするのを勿体ながつて『お玉さん』と称したほどだ。アメリカでも玉葱を作りはじめて、ばつたり貿易が止まると玉葱を内地向けに売りさばかなければならなかつた。お父うの不機嫌は外地向けが止つてからだ。

「そないうまい話ばかりある筈ない。日本でできるものは日本人に売つてたら間違いないんや」

とお母んは諦めたように言つたが、こんな小さな中農で作男を抱えているのはまったく無駄な話だった。玉葱がおもしろいほどアメリカに売れた頃は、作男を何人も使つて玉葱を栽培したが、貿易が不調になつてからは一人減らし、二人減らし、三人減らしという風に暇をやつた。それ等の作男は人手のあまつた紡績工場に雇われて行つた。そんなところへ就職するからには賃金の廉いのを承知で雇われた。雇い主の方はこれ等のだぶついた労働者群から、自分の好きな働き手をひっこ抜いた。留吉も当然、この家から暇を出される筈だったが、留吉は工場労働者は性に合わないと言ひ、根っから百姓が好きだというので、賃金といえは申訳程度のものだったので、お父うも我慢して使つていた。実は留吉は娘のお夏に惚れていたので、彼女の顔が見られて一つ屋根の下に暮せるなら、どんな廉い賃金でも辛抱する氣になつたのだ。事実、一つ棟の下に暮してみると、台所の框の上り下りに彼女の裾からこぼれる白い脛を見ただけでも満足できた。堅肥りのした艶のある娘らしい脛は、まるで羚羊の脚のようにすつきりして見えた。

一昨年のお盆の夜、水間寺の盆踊りに行くと、三重塔の傍で踊りを見ているお夏を見つけた。

「踊らへんの」

と誘うと、こつくりして一緒に踊りの輪の中へ入った。ぐつしよりと汗ばんだので寺の後を流れている川の川床に連れて行つた。清冽な水が飛沫を挙げて岩にぶつかっている。お夏は留吉の手にぶら下つて冷たい水の中に足を入れて冷やした。

「冷めたいわ」

「好え氣持だっしやる」

いつまでも水の中に足を漬けていると、何時の間にか汗が引いてしまった。川上から吹きおろしてくる風が鬢のはつれ毛をなぶつて、赤い帯をお太鼓に結つたのも今年の夏が初めてというお夏は、もう娘らしく胸がこんもりしていた。

「さあ。もう上り」

ぐつと手を把つて引きあげる拍子に、二人は岩の上で抱き合っていた。

作男の留吉にとっては幸いな夏の一夜だった。このことがあつてからお夏との距離がぐつとせばまった。それでも留吉の方からは手も足も出なかった。

水間村の若い衆等は、つい先達まではこましゃくれた小娘に過ぎないと思つて見逃していたのが、華やかな娘振りを見せつけられ、彼女の姿がぐうつと大きく映つた。

「おい。あれ誰がいつこるやろ」

「わいにまかしとき」

「阿呆。わいが目エつけとったんや。わいやないけ」

彼等は若い衆の溜り場みたいになっている駄菓子屋の店先で、数ある娘の品定めの後、お夏に及ぶと口争いが生じた。

「そんなら斯うしよう。最初に彼の娘と口をきいたもんからにしようや」

「口きくぐらいやつたら学校で同じやつた奴の勝やないけ。そんな甘い条件はあかん」

「そんならどない難しい条件やねん」

「決つとるやないけ。昔からのしきたりにせんかい」

「それは」

「夜這いよ」

これは皆に難しいと思われた。

昔の夜這いでも、大抵は何等か相手に通じ合つていればこそうまくいったので、顔見知りでもない異性が、いきなり深夜に及んで襲つたところで成功するためにはなかつたのだ。(今夜行くで——)と言ひ交わしてあればこそ、魚心に水の女は雨戸の棧をはずしておいて呉れたのだ。この可憐な心尽しがあればこそ若い者等は親兄弟の耳を驚かさないう工夫を凝らしたのだ。いつとなく夜這いの馴染みを重ねれば、女は既に彼の近づいた氣配に起きて、わが床まで恋しい男を背負つて運んだなどという粹

な話は、夜這いという本来の意義からは遠く離れていたのだ。

侵入の第一歩と言われる縁側の溝に小便を流すというのも、実は兩戸の滑りを軽くして音を立てまいという工夫として受け取られているが、実はもつと別に落ちついで度胸を据えるためという方が本義のようだ。これさえも音立てて他の人々に聞かれまいとする女のはからいに応じたもののなのだ。

まったく口をきいたこともなく、まして見ず知らずの娘の許に夜這うのこそ本当の夜這いなのである。しかしながらこんな大それた冒険を試みるのも、わが村内なればこそで、仮りに失敗して捕えられても村内々のことだと内済にして貰えたものだ。されば他村の若い者が夜這いするというのは命に関わるほど危険の伴う冒険だった。若し失敗して捕えられても他村の若い衆ならば容赦してもらえなかったし、まして村の若い衆等は他村の侵入者を侵略者として私刑を加えずにはおかなかった。

彼等は何度もお夏の家へ代る代る侵入しに近寄った。

「おい。あかん」

彼等は駄菓子屋で鳩首した。

その誰もが失敗したので、しくじったのを照れ臭くもなく告白し合つて凝議したのだ。

「わいもあかなんだ」

「わいかて失敗やった」

「あしこのおやっさんか。目ざとい奴は」

「いきなり暗闇から、ごつい石投げつけよってん。あんなに当たったらイチコロや」

「とても近寄れたもんやないわ」

果して誰だったか、もとより闇夜の忍びだから知れようがなかった。しかしながらお夏の家だけは表は往来に面しているので入りようがなかった。自然、裏の方に廻つて背戸の裏木戸のあたりに忍んでみるのだが、彼等が垣根に近づいたか近づかないうちに、いきなり闇夜の礫が飛んで来た。吃驚して玉葱畑をころがるようにして逃げる背後から、まだ七つも八つも石塊がびゅうつと音立てて飛んで来るのだ。

「おい。縁側の溝に小便こいて来るだけの者さえないのか」

と中の一人が嘆息交りに言うのと、

「阿呆言え。垣根さえ越えんうちにやつつけられるんやで」

「ほんまやな。わい等が行くの前から知ってけつかるみたいや」

「憎たらしい親父奴よ」

「何しろ玉葱売れんようになってから百姓の氣イ荒うなりよつた。おのれの不機嫌を、こちにぶつけくさる」

「ほんまにいな。あんな奴にとつつかまってみい。半殺しにされるで」

「いっそ、だんじり担^かいて軒先へぶちあてたろかと思つた」

「おい。あれ、ほんまにお夏のおやつさんやつたか」

「さあ。それがわからん」

「どいつやろ、いっぺん試してみんことには、はつきりわからへんどオ」

彼等は一人でなく何人か集団でお夏の家を見張った。

夜這い人になる奴が、そつと裏木戸に近寄ると、果して小児の頭ぐらいの石を放りつけられた。

「出よつたア」

と叫びながら玉葱畑を一目散に逃げ出すと、裏木戸を音もなく開けて一つの黒い影法師が、用意していたらしい石塊をびゅうびゅう続けざまに投げつけるのであった。その影法師は石を投げ終ると悠々と裏木戸に心張棒をかけて屋内に入つて行った。

「おい。見たか」

「見たとも」

「誰やと思う」

「お夏のおやつさんやないで」

「せやろ。ほなら誰や」

「作男の留やんや」

「わいもそない見たな」

「いや。間違いないて。あの背格好は留吉ほかあれへん」

「そんなら彼奴は夜つびて起きとんのかいな」

「そないな氣イしたな」

「わい等がお夏のところ^に夜這いするの用心して邪魔してけつかんねな」

「まあ。それしかないな」

「彼奴が惚れとんのと違うか。そんでにわい等が行くの腹立てよんねど」

「それにしても毎夜、あないして起きてると言うんか」

「なんぼ目ざとい奴でも、あないに早う飛び出して来て石投げられへんで」

「彼奴がお夏を覗うとんのやろか」

「何にしても彼奴が居る限り、お夏のとこだけはうっかり垣根に小便もでけへん」

「ほんま。ほんま。あの辺はうっかり歩けへんで」

「難儀な奴やなあ」

彼等はお夏だけは諦めなければならなかった。それにしても留吉の振舞いは癪にさわった。留吉が水間村の出生でないだけに憎しみがかった。

「おい。彼奴は何所から来たんや」

「河内やで」

「ふうん。河内者か」

「せやもん喧嘩早いし、強いし、厄介やで」

「冀力もあるらしい留吉と面と向かって喧嘩する度胸もなかった。」

「そうやとも。泉州者はよ。もつと賢いんじや。あんな河内者とは喧嘩せん。その代り」

「その代り何じゃい」

「その代りお夏をひっかけるこつちや。お夏さえ承知したら、彼奴を引張り出したら問題ないやないけ」

「そりやうまい工夫や。文句無い。ところで、われがひっかけてみせるんか」

「誰かて早いもん勝やないか」

と弱音を吹いたのも自信がないからで、お夏だけは若い衆等も遠くから手を拱いて眺めているより仕様がなかった。

稀にお夏が手拭を姐さん冠りにして玉葱畑に姿を現わすと、彼方此方から目を光らせて村の若い衆等は隙をうかがったが、作男の留吉が四方を睨み廻して寄せつけなかった。よく仔細に注意して眺めると留吉はお夏から少しも離れることなく護衛していた。路傍で搦れ違った村の悪太郎等の四五人連れが、

「わあい」

とお夏に掛け声した時、留吉に、

「下阿呆め」

と一喝され、意気地なく尻尾を巻いてしまった。口惜しいけれども草角力でも大関格の留吉の腕力には敵わなかったのだ。

留吉は主人の娘が漸く村の若者等の目を惹くというところに胸がときめいた。お夏の方は無邪気に受けていたが、留吉は彼等の間で定めし噂になっているだろうと思うと誇らしかったのだ。そのくせ村の若者等が一指をも染めることを許さなかった。彼はお夏が寝部屋に入るのを見定め、台所の柱に凭れてうつらうつらしながら決して自分の床に寝なかった。毛物のように鋭敏になった彼の耳は猫の登音さえ聴きのがさなかった。

その頃、水間寺の裏山に療養所が建った。留吉は旦那の言いつけで、其所へ玉葱を運んで行ったことがある。療養所から裏山の下についている細い山径を辿って来れば好いの、帰り途は荷も無い身軽さに山を越えて戻った。大きな池を迂回して熊笹の山路を越えると、水間寺の開山堂の脇へ出られる。そこを一気に駆け降りて、寺の境内を抜けるのが一番の捷徑だ。

開山堂には行基大菩薩の木像が安置してある。水間寺は行基の建立した四十九院の一カ寺と伝えられている。

留吉は滅多にその辺へ来たことがないので開山堂まで辿りつくと、その狐格子から暗い中をのぞいてみた。埃

まみれで灰白色になった一人の法師の座像が静かにこちらを見ている。何だか気味悪かった。傍の大きな黒漆塗の位牌には天平勝宝元己丑二月二日と金字で記してあった。

行基の伝とその事跡は『統日本紀』の諸所に散見する。その伝は同書の天平勝宝元年二月二日の条をはじめ『行基年譜』『行基菩薩伝』『行基大菩薩行状記』『日本霊異記』などに記されている。彼は俗姓を高志氏といい、百濟王の子孫と称せられ、朝鮮の帰化族だ。

『日本霊異記』によると越後国頸城郡の人とも記しているところを見ると、親達が越後国に居住した由縁によって或は越すなわち高志を唱えたものであろうか。しかしながら『統日本紀』に明らかに和泉国人とあるところを見れば正史の記載として疑うべくもないのである。天智天皇の七年、泉北の家原に生れ、十五歳で出家した。

長じて諸国を巡錫し、数多の民衆を教化した。養老元年四月、讒する人あつて行基とその弟子等は、妄りに罪福を説き、徒党をかまえ、邪法を修めて人心を惑乱するものとして罪せられた。彼の行くところ道路を構築し、橋を架け、池を掘り、田畑を開いて諸民の扶けとなった。永寿池という大きな池や、久米田ノ池などは彼の掘った灌漑用の池だとされ、また大津川の橋、泉川の橋も彼の架けた橋とされ、神前の船息ふねどきという碇泊所は彼の開いた

ものと伝えられている。

彼が畿内に建立した四十九カ寺は、おおむね木島の木材によつた。木島の杣山こまやまは和泉山脈が旧木島の大部を掩うていた林野を総称し、大昔から鬱蒼たる山林地帯を形成し、されば泉ノ杣と呼ばれたのである。

宮木ひく泉の杣にたつ民の

やむときもなく恋わたるかも

という万葉集の歌は、宮殿や民家のためこの地から材木を産していたことを物語るもので、止むときもなくと歌われるほど絶えず伐採していたことを証するのだ。この当時にあつた木島の杣山は右大臣橘諸兄公の封地であつたので、行基が菅原寺を本寺として四十九院を建立するのに、諸兄公に請うて良材を乞うたことが『行基遺誠』に見えるのである。

聖武天皇が奈良に盧舎那大仏を造立せられるに當つて、行基とその徒の協力を期待されること多く、天平十七年、日本最初の大僧正に任ぜられ給い、同じく天平二十一年正月には御自ら親しく行基から菩薩大戒を受けさせられ、そのことによつて行基菩薩の号を賜つたという。彼は木島郡に竜谷山水間寺、神亀三年には深谷山観音寺を建てた。観音寺はわずかに釘無堂一字を残すのみで、あたら廃滅に帰しているが、水間寺は隆々として今日尚参詣の諸人が絶えないのである。

かくて行基菩薩は天平勝宝元年二月二日、八十年の生涯を菅原寺に終った。面白いことは水間寺開山行基菩薩以来、第二世法印大僧都光信から脈々と伝えて七十二代權僧正春曉に至るまで法脈を継承しているのである。

汗も引いたので留吉がやおら開山堂の濡れ縁から立ち上ろうとすると、村の若い衆が三人ぬっと樹影から姿を現わした。

「われ。留吉やのう」

「よオ。何の用があるんじや。わいは間違いのう留吉やが」

「われやな。夜な夜なわい等に石投げつけよんのは」

「ほう。そうか。われやったか。こちのお嬢さんのところへ夜這いに来せさらすのは」

「知ってけつかな」

「わい等の面ア知らんけど、夜さり人の家へ忍んで来るのは夜盗やないけ。それを追ひ払うて何が悪いのんじや」

「他所者がしやら臭い真似すると承知せえへんぞ」

「どないさらす氣じやい」

「こないしたるッ」

と言うと、いきなり一人が打ちかかって来た。留吉はすうと体を洗めて、目にもとまらぬ早業で其奴の目と鼻のあたりを、ぐわんと拳で打った。

「あ。痛う」

其奴は顔を押えるとくたくたとしゃがんで仕舞った。

「おのれ」

左右から飛びかかる奴を、二人の襟がみひつ攔むと、二つの頭をがちんと打つけた。

「わあっ」

と叫んで二人は棒倒しに倒れた。

まったく一瞬の出来事だった。留吉はお夏のところへ夜な夜な忍び込もうと企らむ奴等の面を見ると、一頓に怒りを爆発させたのだ。頭を角刈りにして、面跑など吹き出している田舎の若い衆を見ると、働きもしないでのへへと夜這いなどに来る奴等に対して反吐が出る想いだ。

「よオ。ド甲斐性あったら今夜も来い。ド頭から糞ぶっかけたるわい」

と吐きだすように浴びせかけておいて悠々と引きあげた。

その夜から若い衆はお夏の家へ寄りつかなくなってしまった。

はつきりと青年等がお夏に目っこを入れて、何とかする気だとわかると留吉は目の色を変えて護衛した。お夏から目を放さない留吉にお夏は異常な圧迫を感じるようになった。